

水稲新認定品種トヨサチの栽培特性

吉田茂敏・詫間洋志・小野洋介(大分県農業技術センター)

Shigetoshi YOSHIDA, Hiroshi TAKUMA and Yosuke ONO : Some Characters of Cultivation of the New Recommended Paddy Rice Variety TOYOSACHI

1. はじめに

大分県は1987年に水稲農林287号, トヨサチを晩生の良食味品種として認定品種に採用した。トヨサチはネシホマレに比べ収量性がやや劣り, 短稈穂数型であるため過繁茂になりやすい傾向がある。この欠点を補うため栽培特性の検討を行った。その中の窒素施肥法について報告する。

2. 試験方法

第1表に示すように1985年は壤土の水田で, 標準施肥(No.1区)と基肥減分げつ肥(No.2区)の比較, 1986年は壤土と埴土の水田でそれぞれ標準施肥(No.3, 5区)と基肥減つなぎ肥(No.4, 6区)の比較を行った。これら2年の検討結果から, 1987年は埴土のみで標肥(No.7区)と標肥プラスつなぎ肥(No.8区)の比較を行った。穂肥, 晩期穂肥はいずれも共通でそれぞれ出穂前20日にN成分で0.4kg/a, 出穂前5日に0.2kg/aを施用した。また, この試験の栽培法はいずれも稚苗移植である。

第1表 試験方法

年度	1985		1986		1987	
	No.		No.		No.	
移植期(月・日)	6.27		6.19		6.24	
栽植密度(株/㎡)	22.2		22.2		21.6	
土 壤 条 件	壤土		埴土		埴土	
N施肥量 (kg/a)	基 肥	0.6 0.4	0.6 0.4	0.6 0.4	0.5 0.5	
	分げつ肥	0 0.2	0 0	0 0	0 0	
	つなぎ肥	0 0	0 0.2	0 0.2	0 0.1	

注) 1985年分げつ肥は7月11日
1986年つなぎ肥は8月6日
1987年は8月3日

3. 結果及び考察

最高茎数は第2表のように1986年の結果では基肥量を減少させることにより少なくなった。しかし1985年の基肥減分げつ肥区は7月11日という早い時期の追肥のため最高茎数は標準施肥区に比べ少なくならなかった。

収量及び収量構成要素は第2表のように, 1985年の基肥減分げつ肥区は穂数が多く, 全穂数が多いが, 登熟歩合が低く収量は標準施肥区と差がなかった。1986年の基肥減つなぎ肥区はいずれも穂数がやや多く, 一穂穂数も多く, そのため全穂数が多くなり, 登熟歩合はやや低下したが, 標準施肥区に比べ多収となった。1987年のつな

第2表 収量及び収量構成要素

No.	1985		1986				1987	
	1	2	3	4	5	6	7	8
最高茎数(本/㎡)	727	732	675	619	599	515	790	888
程 長(cm)	68	69	82	79	69	72	85	87
穂 数(本/㎡)	399	449	422	446	400	427	430	460
1 穂数(粒/㎡)	67.3	63.9	62.6	67.5	57.7	67.7	66.3	68.5
全穂数(×100粒/㎡)	269	294	264	301	231	289	285	316
登熟歩合(%)	89.1	87.6	91.0	88.6	89.1	82.3	92.0	88.7
玄 米 重(kg/a)	53.2	53.9	62.0	64.0	53.5	58.9	65.1	64.9
品 質	3	3	4	6	4	5	3	3

注) 品質は上下 3中上 4中 5中下 6として示す

ぎ肥施用区は地力むらのためか生育量が必要以上に大きく, 穂数がかなり多く, そのため登熟歩合がやや低下し収量は標準区と差がなかった。

品質は1986年のみ施肥法間で差がみられ, つなぎ肥施用区はいずれも品質が低下した。

トヨサチの栽培は基肥量を減らすことにより過繁茂を防止し, 適正生育量を確保する必要がある。ただし品種特性としてラグ期に葉色が低下しやすいため, 7月下旬に追肥を行う。よってトヨサチの施肥法はネシホマレに比べ基肥をやや減らし, a当たりN成分で0.4から0.5kgとし, その後の稲の生育及び気象条件により7月下旬にa当たりN成分で0.1kgの追肥を行い, 穂肥, 晩期穂肥は従来どおりとする。

第3表 良質, 安定収量のための目標収量構成要素と生育量

最高茎数 本/㎡	程 長 cm	穂 数 本/㎡	一穂 穂数 粒	全穂数 ×100 粒/㎡	登熟 歩合 %	玄 米 千粒重 g	玄米重 kg/a
600~ 700	80	450	55~ 65	250~ 280	90~ 95	22~23	55~60

この調査で得られた良質安定多収のための生育量, 収量構成要素は第3表のように, 程長80cm程度, 穂数は㎡当たり450本で, 全穂数は㎡当たり30,000粒程度が多収であった。しかし穂数と品質の関係から, 良質米生産を目的として, 穂数は㎡当たり28,000粒にとどめておくべきであろう。